

第七十三回 仏教文化講演会記録

大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって

東海大学文学部教授 片 山 章 雄

司会

仏教文化研究所講演会では今まで真宗学、仏教学の先生方を中心に行っていたのですが、今年度から、それ以外に仏教文化研究所に属しております研究班がございます。外部から講師の先生を呼んで講演会をやろうと今年からなりまして、今回は大谷文書の研究班から始めようとなりました。本日、お迎えいたしました片山章雄先生は一九五七年、北海道のお生まれで上智大学に進まれまして、その後、大学院を出られて東洋文庫の研究員をなさった後、現在の東海大学文学部にご奉職なさいました。片山先生のご専門の一つは突厥文字の研究、突厥時代の研究が一つございます。それとともに昔から大谷探検隊の研究をなさっていたにつきまして、私たちの知らないイギリスの資料とかを発掘してくださいました。『中亜探検』という中公文庫から出ております橋瑞超さんの記録を編集いたしました金子民雄先生は、片山先生の書庫はすごいと。これだけ大谷探検隊のものが揃っているのは見たことがないというくらい大谷探検隊のことに關して集められておられます。今日は大谷探検隊に直接のことではなく、大谷探検隊が将来いたしました文書、これはいろんな形で復元されておりますが、お墓の中から出てきたもので、お墓の裝飾に使われたものもございます。そういうものの一端を今日、お話いただくことになっております。それでは片山先生、よろしくお願いいたします。

片山

ただいま過分な紹介をいただきました東海大学の片山と申します。今回のこのお話をお引き受けして、後で少し後悔しております。考えてみると龍谷大学に来て大谷探検隊の話をするのは釈迦に説法でして、どうして返事をしてしまったのか、三十数年来の北村先生からの不意打ちの一瞬のことでした。その後、「大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって」という題名を出させていただきました。最初、確かに私は断片になっていると、何とか元に戻したい、探検隊が持ってきたものが、本来ならこれくらいの価値があるものがバラバラのままだと価値が半減してしまう、価値を認識できないということ、それで最近の作業成果がございましたので、お引き受けしました。また、ご縁がございました、今年三月に、旅順博物館と名古屋の興善寺にある朱雀の断片、これは吐魯番の地下の墓室の四壁に飾った青龍や朱雀や玄武のうち、朱雀の頭の部分三点ですが、それらを画像としてつなぎ合わせました。とくに真中の部分は探検隊員を出された興善寺の橋家の方からデータを頂戴しまして、三点をカラーでつなぐことができました。そういうことがあり、また玄武の資料もずっとカバンの中に入っていたのですが、七年かかってわからなかった玄武の輪郭が偶然わかったのが六月八日で、今日はその話を含め、そのような断片資料に重点をおく形になりました。お配りしたものは、レジュメと図版（カラー刷りのもの、モノクロの作業途中のもの）があります。前もって要旨を出すことになっていました、その時点で玄武のことを含めて話題にしようと思ひ、レジュメの冒頭にも再録しました。以下の通りです。

【要旨】大谷探検隊の将来資料は多種多様だが、断片ながら画像公表されている元の姿や過去の関係作業の推定から、資料追跡や接続復元の問題に迫ってみたい。具体的には、ベゼクリクの壁画「衆人奏楽図」、旅順博物館の經典断片帖の中の吐魯番出土社会経済文書、そして最後に吐魯番古墓中の朱雀文書彩画三断片の接合、玄武文書約四〇断片の接合を扱い、研究における画像公表、不断の観察、作業追跡の必要性を示したい。

## はじめに

まず、「近年の画像状況」であります。今日お話しする前に龍谷大学の図書館で古文書を見ようと思つたのですが、その時間がありませんでした。今日の話の資料の一部は、かつて龍谷大学図書館で閲覧したものもありますが、文書実物をすべては見えていないわけです。見ていなくてもどこまでできるかということ、間違っていることもあるかもしれませんが、最近の龍谷大学所蔵の吐魯番や敦煌のもの、大谷文書と番号がつ

いている文書が、ほとんどすべてインターネットに接続しているパソコンで見ることができ、かなり詳細な画像が入手できる状況にありまして、穴の位置、シミの写り具合までわかるわけです。これを放っておく手はない。逆に言いますと、昔は貴重書閲覧願を出して見ていたのですが、今は自分の家のパソコンの前でかなり鮮明に見ることができ。そうなりますと今日、若い方もおられますし、学生や院生の方が、もちろん若い方に限りませんが、パソコンを操作して、これらの文書の検討を本気でやりだしますと、研究に係わるいろいろな作業ができるのではないかと、特にIDP (International Dunhuang Project) という、国際的、敦煌学という名前がついていますが、実際には吐魯番の古文書の画像も公表されているサイト、それと龍谷大学の古典籍のサイト、これら二つのサイトでは古文書の画像の処理が違い、両方で見られるものもあれば、片方で見られないものもありますが、二つのサイトによって相当程度状況が進んできたということがあります。今日はそういう画像を使いまして少し試みた作業のこと、及び自分で入手し、公表していいだろうものについて、一部お示ししようと思って、このような話を考えました。

#### 一、大谷探検隊と将来品群、断片資料の問題

大谷探検隊が持ってきたものを将来品と言いますが、これは探検隊が一九〇二年から一九一四年までの間に三回にわたって中央アジア、一部インド、一部中国内地から持ち帰ったもの、探検終了時に京都の西本願寺（及び京都博物館）に仮に置いてあったものと神戸（当時は武庫郡本山村岡本）の六甲の二葉荘という別荘に置いてあったものがあり、その状況のまま大谷光瑞上人が門主を引退することになり、その後、これらの二（三）群が、分置状況から移動し分散の形になりまして、最終的には一九四五年時点で日本にあったもの、中国の旅順にあったもの（少し後に一部は旅順から北京に行きましたが、これは敦煌の經典類です）、朝鮮（韓国）の博物館にあったものが、そのまま日本の敗戦を迎え、分散するということになったわけです。戦前は旅順に關東庁、韓国には朝鮮總督府の、それぞれの博物館の歴史があります。実は龍谷大学にある古文書その他の将来品も、戦後の収集分以外は、大正時代に大連から送り返されてきたものです。「大連関東別院光寿会」という記載がある木箱に入っていたとされ、実際にその箱が展示されたこともあります。

発掘品、将来品に対して、大陸、特に旅順で何らかの作業がなされていたと考えられ、現に仏典の研究、たとえば法華経まで含めた研究もあるわけで、いろいろな經典類があります。社会経済文書も經典類の他にあって、それらに関しても何らかの作業がなされていたと考えられます。

それで最終的にわかりましたことは、橘瑞超隊員の『中亜探検』という一九一二年に出た本（原本）がありますが、その文庫版が一九八九年に出ている、その最後に年譜があります。文庫にしかないものですが、その年譜を見ますと一九一六―一七年にかけて橘瑞超は旅順におりました。そのことは本人も、わずかばかり旅順の何々を見にと、戦前の雑誌『大乘』にエッセイを書いています。一年半以上旅順にいて、その時に本人、部下の手伝いの人が整理作業をしている。その作業がおそらく中断されたまま、その後、一部のものが日本に送り返されてきて京都に来たり、探検隊員として持っていることになったものが名古屋に行ったりしています。大谷探検隊の将来品が単に分散し移動したというだけではなく、背後にあった整理作業、それが断片の問題にも関係しているのではないかと思いました。旅順の二断片と名古屋の一断片がつながったり、京都の龍谷大学の断片と旅順の断片がつながったりする。つながるのはあたりまえなのですが、実は旅順の經典の貼り込み帖に、經典でないものがあった、それも含めてつながる。これはどういうことなのかということをお前から考えておりました。その他に、断片がつながるといえば、つながるのですが、ぴったりつながらないで、間をあけてつながるかのような状況もありましたので、以下の話題も含め考えたわけです。

## 二、ベゼクリク壁画「衆人奏楽図」

現在東京国立博物館所蔵の、レジュメの①の「衆人奏楽図」が有名な壁画であることは言うまでもないのですが、この正確な位置、吐魯番のベゼクリク石窟のどこからの壁画かというのがよくわからない。内容の解釈としては、六人の人物が、お釈迦さまが亡くなったのを喜んで外道の楽器を奏でている図だとされたりしていました。それに関する研究として、現地に行かずして（行つたにしても普通では見られない石窟なのですが）、書物や図版からその位置を探ろうとしたのが、レジュメの②の「壁画配置推定案」です。これは私が指導した学生が書いた卒業論文で、今は会社勤めの方の解釈です。『東海史学』第三八号に、卒業の翌年二〇〇四年に載ったもので、山口みゆきさんが、いろいろな図版の縁のところを集中的に凝視して、多分、問題のベゼクリク「衆人奏楽図」は、ベゼクリクの第三窟の左の奥の方の場所で、現在残っているのは推定案の図では右上と下の部分、これらがありますが、それらと間をあけてこういう位置になるだろうということを、いろいろな角度から検討し、公表図版からほぼ証明したということで、私は審査していいだろうと考え、雑誌に載りました。その年の夏に私は現地に行くことができ、その時の許可を得て撮影したものが、レジュメの③の現地写真です。プロジェクター画像では、下に撮影許可済みの領収書を添えてあります。

一〇六センチ×一〇六センチ、正方形の壁画に対応する跡がうつすらと見えます。当時の探検隊の壁画を採取する技術の関係で、一定の幅を傷めてしまいがちながら採っているその輪郭、窪みが見えます。これは多分、こういう部分を明瞭に示すことは控えられていたので、どここの窟から採取されたものか証明できないまま、これまでの研究者が推測として窟番号を書いていたのです。何としても事実の解明のために撮影したいというのを伝えまして、二〇〇四年八月に撮影許可の機会をいただきました。断片壁画は、第三窟のすでに説明したあの位置からと、確定してよろしいかと思えます。ただ、残存壁画との間には致し方ない破損幅がありますので、直接はつながらない、中空に浮いてしまう断片ということで、これが難しい点だろうと思います。クチャのキジル石窟のドロナ像壁画も、周りにいろいろあるのに、真中に、中空に浮いたような形で元の位置を想定する必要があったという難しさを伴います。なおこの「衆人奏楽図」壁画に関しては、中野照男先生の研究、「ベゼクリク石窟第三窟の衆人奏楽図について」(樋口昭代表、科研費報告書「中国新疆ウイグル族におけるコンテクストの変化にともなう楽器文化の変容」二〇〇六年)によりますと、経典にもあるそうですが、涅槃に入った釈迦に対して花や香を捧げ、音楽を奏して供養した。釈尊の死を喜んで奏楽する六人の異教徒と見る説よりも、花や香、音楽で供養したという解釈の方が、文献からも合うだろうということが言われております。この研究が出したのは二〇〇六年で、比較的新しい解釈ですが、おそらくそうだろうと思います。こう見えますと、有名であり、断片で、意味も、わかったようなつもりをしていたのですが、よくわからなかった大物がまだまだあったということです。これは私の成果ではなく、私は単に現地で写真撮影しただけですが、必要不可欠な点もありますので、今日のこの場で紹介し公表できれば、この問題はいつそう進むのではないかと思います、お示しした次第であります。

### 三、旅順博物館所蔵の藍冊(ブルーノート)中の吐魯番出土社会経済文書

次に旅順博物館所蔵のブルーノート、経典断片の貼り込み帖ですが、その中の吐魯番出土社会経済文書についてです。ブルーノートはまさに龍谷大学が一九九〇年代以来、旅順博物館と共同研究されているものです。レジュメの④は龍谷大学で出された研究成果報告書の口絵にあったものですが、仏典の断片を貼り込んだものが五〇冊以上あり、旅順へ行ってみせてもらった時も「研究は龍谷大学と旅順博物館で進めている」と聞きました。ところが面白いことに、その中に絶対に仏典ではないという断片があるのです。どうしてあるのかというのが不思議で、仏典断

片を貼り込んだはずなのが、それが剝がれて余白、空白ができてしまったところに、ちょうど空いているからと社会経済文書を貼り込む、こういうことがおそくなされたのだらうと思います。その時期というのがいつ頃か、いろいろ問題がありますが、貼り込み帖と、さらに貼り込めなかった残りのものがあります。私が旅順で見ましたところ、こんなふうに仏典の断片が貼り込んであるのですが、社会経済文書もあり、また、貼り込みきれなかった断片が袋に入れて、一九一七年（大正六年）六月付で封をしてある、そういうものがあり、その中にも社会経済文書があったりします。それは、何人かが作業をやって、ところが作業にリミットが来て、それで責任者で封をしたということなのでしょう。

作業が途中で、貼り込み帖には仏典だけのはずなのに社会経済文書も貼り込まれ、また未整理の袋の中にも関係する社会経済文書の断片があって封をされたりしている。その封を、一九二三年にシルヴァン・レヴィが日本に來た帰りに旅順に寄って、彼が開けて、また封をして、私は見たという意味のシルヴァン・レヴィのサインがある袋が二つありました。

一九一六、一七年に、旅順でどのような作業が行われていたかということが大事かと思われれます。それで、私は神奈川県で勤務しておりますので、たまたま二宮町の徳富蘇峰記念館に行き、徳富蘇峰と大谷光瑞、橘瑞超の関係というのがあるので、そこで、次のようなものを確認しました。大正六（一九一七）年二月五日付の大谷光瑞発徳富蘇峰宛の書簡で、所蔵番号は二二五番というものです。上海あたりで大谷光瑞が投函したらしく、「橘生ハ旅順ニ居住ノ筈ニ御坐候、小生ノ処ヘハ時々文通致シ居リ、何ニテモ古文書ヲヒ子クリ居ルラシク御坐候」とあります。

「古文書をひねくり居る」というのが私にとって一番興味深いところなのです。もちろん旅順には仏典やその断片が多数あり、それは他の手紙でも「何を手放せったって、一番大事な経典を手放せるか。これは、所有権は自分で、寄託しておくのは構わないけど」という文脈で出てきますので、仏教者として大事にしている仏典とは別の表現の「古文書」というのは、おそらく我々が歴史研究に使うような社会経済文書だろうと思うわけです。

そのようなものを探しますと一定数あります。たとえばレジュメ⑤の左のブルーノート収録文書は、社会経済文書、具体的には土地制度関係文書で、⑤の右は大谷文書の欠田文書と区分される文書です。左は二〇・一四八〇―五―七の番号をもつ、法華経第四帖とされる貼り込み帖五ページの七番目で、明らかに仏典ではない社会経済文書で、公表されている写真です。右は大谷文書二九〇五のインターネット上で公表されている鮮明な画像です。これらを近付けていって端のところをよく見ますと、見事につながります。かつてはそれぞれの部分、部分しか読めな

ったものが、つながることによって、それぞれの社会経済文書の、これまで関係なかった行が、一つの行になるということがわかる。さらにやっていますと、このような古文書は八層の層をなしている。古文書を二次利用する。紙として文字を書くという役目も終わって、読むという役目も終わって、強度をもたせて維持するということから、何枚か貼り合わせ一定の厚みをもたせて、その一番外側に絵を描き彩画紙片となる。そして、穴を開けて、そこからがよくわからないのですが、打ちつけるのではなくおそらくは吊るすのだろうと思います。モビールという飾り付けがありますが、あんな形かもしれません。穴が確かにあり、破れ方や剥れ方に一部納得いかないところもあるのですが、そういう使い方で二次利用されたのだらうと推測されます。

紙を八層、九層貼り合わせる。最近わかってきたことは、⑤は文字方向から九〇度横に傾けてありますが、レジュメの⑥のような雲の輪郭、そうなるような古文書が、重なって、雲の形をなしている。最近、そのことを「大谷文書・旅順博物館文書中の吐魯番出土雲之雲型文書の一例」(『西北出土文献研究』第七号、二〇〇九年)として書いたのですが、一層目が横だとすると二層目は縦、三層目は横というように層位をなしている。古文書が縦横になっているのはどういうことなのか。それは、雲は比較的小さいから縦横がどうでもいいじゃないかということになるのですけれど、実は大きなものになってきますと、文字の進む行の方向が縦か横かは大変な問題です。八層、九層あると、ほとんど見事に四層と五層くらいに縦のものと横のものが分かれる。断片ばかり眺めてみると、見事に分かれるというのは、比較的大きなものを、紙を何列かに分けて並べて、次は縦に何列、次は横に何列、という作業をやる。その最大輪郭の中で大きなものを作り、残余の一部で小さな雲を作る、そういう作業がわかってきて、しかもその各列各列がなす層の文書は、大体は土地制度の關係の、同じひと続きの文書から出たのでしょう。彩画もある青龍とか朱雀とか玄武、そして複数の雲は、同じひと続きの文書から二次利用されたと思うのです。それらの作業結果は、小さな雲ですら縦横となっていることで、通常だときほど意味をなさないのでありますが、それは大きなものと一緒に作ったと結果と考えられるわけです。

旅順の社会経済文書のうち偶然にも数点が仏典貼り込み帖の中にあるということ、それからまた、貼り込み帖に貼り込まれずに断片のまま袋の中に残っていたものにも社会経済文書があるということは、まず、この作業が中断されていること、もう一つは、各層を剝がしていたのだらうと思います。探検隊が入手した時には八層、九層に貼り合わされていたものを、外側は絵ですから、青龍の絵だったり、雲の絵だったりするのですが、剝がしたところの絵さえ傷めなければ、見る分には外側の層だけを見ていればいいわけです。ベゼクリクの壁画も本来は少し反って

いるのですが、現在は絵画の表層だけになってしまいました。厚みを含めて持ってきたものを、戦後いろいろな強化処理、表面処理をしているうちに、今は、人間でいえば皮膚だけでできているような状態になっている。外側を彩画として認識するとともに、橋瑞超や作業を手伝ったその他の人は、文書の方には何が書いてあるのだろうということで、八層九層のものを剝がしたと思われる。

剝がしていろいろな断片層になった中には、アクシデントもあつたらしい。一つサンプルがあるのですが、それは同じ形をした⑥で八層が確認されたのですが、一番外側の彩画層というのは一枚のはずです。同じ形をした、このプロジェクト画像は書物に載っている文字部分ですが、文字はわずかに三文字、四文字が見えるだけです。この裏が彩画層です。ここここに色がついています。これらは一つのものの裏表です。これは彩画層だというのが一番外側と考えるのですが、実際に旅順に行きまして参考までに写真を撮ったのがこれです。文字と彩画です。一方、この写真と同じ形をした彩画がもう一つ、先ほどの書物に載っている彩画がある。外側が二枚あるはずはありませんから、雲の一部とはいえ、同じ型でも当てて作つたのだろうか、こういう雲が他にもあるのかなと思いましたが、実はそうではないのです。

先ほどの写真の彩画と書物に公表されている彩画の撮影写真を重ねて当てていきますと、ここでぴたり重なる。未公表で新規撮影の写真が一番外側の彩画層で、書物ですでに公表されている彩画は実は二層目なのです。剝がしているうちに外側の彩画層の一部が二枚目、二層目に持っていかれた。彩画層のここが抜けていて、その抜けている部分に二層目のここが入るというような、なかなか論文の文章や図版では書き示せないようなことがありました。それも、見ていた時には気がつかず、帰国して論文に書こうと思つたら書けなくなり、三日くらい考えて、ひよつとしたらこうかもしれないと思って透明シートで二つの層を作り、重ね合わせてみますと合うことになったわけです。そのような断片だったことの他に、古文書にだけの層に関しても、何層にもなっているものを剝がすという作業をしている。その作業が中断してしまったということがあつたと思われれます。

#### 四、吐魯番古墓中の朱雀文書彩画三断片の接合

次は、先の話と連動するのですが、吐魯番出土の朱雀の文書がありまして、レジュメの⑦は龍谷大学所蔵の関係する大谷文書中で、上下が一番長い大谷三三八五文書と、左右が最も長い大谷二八八九文書を重ね合わせた画像です。そしてレジュメの⑧の三断片のうち、上下が、旅順博

物館にあるもの、真中が名古屋にあるものです。上下のカラーは旅順に行かないと見られないものでした。真中の写真は、四十数年前に、東京国立文化財研究所におられた上野アキ先生が、橘瑞超隊員ご健在の時に撮影し、『美術研究』第二三〇号に載ったものです。それが、朱雀の目のすぐ上で切れている旅順の断片の上に乗るだろうことは、東京大学の大津透先生と野尻忠氏、稲田奈津子氏の連名の論文「大谷文書唐代田制関係文書群の復原研究」(『東洋史苑』第六〇・六一合併号、二〇〇三年、六一ページ)で、文書裏側図版からの彩画トレース案として示されました。何度か旅順博物館に行き、その都度作業用に撮影させてもらったり、つながりを考えたりしました。旅順の断片の上に名古屋の橘瑞超隊員ご健在時撮影のもの、掲載雑誌ではモノクロのものが乗る形で接続するのはいいのですが、それにしてもそれらの姿を併せたものも公表されていませんし、さらに名古屋の断片の上がどうなるのかということまでは、誰も考えてもみなかったようです。名古屋の断片の上に旅順の小さな断片が乗るといのが、まさにレジュメの⑧なのです。この成果は、もともとカラー、モノクロ、カラーという形で出す予定でしたが、間際にお願いで急遽画像の提供をいただき、⑧の改善版としてカラーで三点を接続させたのが、三月に出ましたこの報告書、土肥義和代表「敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究」に掲載しましたこのカラー図版です。この画像は、現時点ではこの報告書掲載だけが許可されていますので、この場でも報告書のページを開いてお示しする次第です。

実は、旅順にはまだ朱雀の文書の断片があります。それは旅順博物館で出している古文書の資料集には載っていません。そういうものがまだあることはわかってはいるのですが、なぜそれが、旅順で社会経済文書も含めてまとめて出したはずの資料集に抜けているのか。推測ですが、最初の一九一六、一七年の頃の探検隊関係者の作業の後を引き継いで、日本人が戦前期に、仮にこういう一群になるのだらうとされた、形の上でのひとまとまりの紙類、実際には古文書なのですが、それがそのままになってしまい、別群とされて古文書の番号がついていない、こういうものもあるようです。朱雀文書に関しては、大津先生他の研究に、関係文書の番号が載っているのですが、それ以外にもまだ、龍谷大学の文書中に朱雀の輪郭部分をなす一点があることがわかりました。それが、他のどの文書とつながるかを言わないと意味がないのですが、現在、検討中です。

## 五、吐魯番古墓中の玄武文書約四〇断片の接合

朱雀の頭部三点の断片は、先のようにつながることができましたが、いよいよ玄武文書の断片の話になります。最近、玄武関係らしき断片の原寸大のコピーを持ち歩いていましたところ、三週間前に運良く、ある見通しが立ちました。今日、関係文書を閲覧して実物を再度見ないといけなかったのですが、インターネット上の公開画像がきれいなので、実際にはそれでも十分という状況です。玄武という、亀に蛇が巻きついていく合体物のうち、蛇が部分的に付着しているものがあります。プロジェクターの画像は、大谷二三七六Ⅲという文書の裏ですが、右下に伸びた部分の途中の彩画は蛇、赤と黒で描かれている蛇であることは確かなのです。これまでの玄武の研究というのは、レジュメの⑨の「大津透氏他による玄武と爪形A・Bの提示」に入れましたように、先の大津先生他の研究で、⑨の上に入れたその論文の図一七にある「その他の復原図像四」、これは複数ある古文書の最大輪郭で、先の文書も重なるのですが、蛇が巻きついていく上の部分です。頭が残念ながらありませんが、尻尾とひとつながりの蛇の胴体が、左右から上の方にきて、一番上で尻尾と首でからまり締め付けているのですが、ここには亀に巻きついていく部分がなく、頭も欠落している。これだけで、玄武、玄武の一部の輪郭だと言われていました。確かに玄武の一部ではあります。

一方で、旅順博物館の玄武らしい彩画・文書は、資料集でもある郭富純・王振芬共著『旅順博物館蔵西域文書研究』（万巻出版公司、二〇〇七年）という書物の一二九ページにモノクロで載っています。レジュメの左とボードに示したのですが、これを見て、間違いなく蛇が亀に巻きついていく下の部分だと確信を得て、何とかならないかと思っていたわけです。幸いにして、資料集には彩画面と文書面の両方が載りました。文書面だとレジュメとボードのようになっていきます。よく見ればわかるのですが、この形は、どこかの文書に類似形があると思われましたが、一番気になりましたのはレジュメの左に入れました大谷四八八一という文書です。この文書は、蛇の途中からちぎれている部分、何巻きかしてさらに上に上がっていく部分に関係があつて、旅順の彩画・文書だと二巻き目はこの端で切れていて、三巻き目は宙に浮いて上に昇っていく部分、その部分がちぎれているのと、上に昇っていない部分が小さくギザギザというか、段々になっている。これは何枚も貼り合わせて後で色を塗り、その後で輪郭として切ったのだと思います。旅順の文書のここに穴があり、それと同様の穴は大谷四八八一のここにもあつて、いい形になっております。大谷四八八一と近い形の文書は他にはないか。いくつか文書はあるようです。さらに大谷四八八一よりも左側が延びて

いる文書はないか、というように問題は展開していきます。

蛇が上方に浮いていくところの切れ方は、旅順の彩画の裏の文書面の右上や、大谷四八八一文書の右上部分ですが、これはまさに大津先生他の⑨の図一七、蛇の部分の右下のちぎれた部分とびつたり合う。そういうことからこれは行ける、と考えました。この旅順博物館の彩画が、外側第1層の彩画面です。その彩画の裏側が第1層の文書面になりますが、実はもう一点、第1層には彩画・文書の両面の断片があります。それは大谷一四七〇という、「大谷文書集成」第壹巻（法蔵館、一九八四年）という本では、「高昌国時代」となっている文書でして、ボードのものはIDPのページの画像を原寸にして切り抜いたものですが、この裏側はそこでは公表されていません。龍谷大学の古典籍ページにもありません。「大谷文書集成」にはモノクロ図版があります。ここではわずかな文字だけが読める文書面しか示せませんが、この輪郭からすると、どうしても先の⑨の左上のこの位置に来るもので、これは、問題の玄武の、蛇が絡んだ左の側で、頭とは思えませんから尻尾になる。この文書と旅順の文書が、玄武の第1層の二断片になります。

問題は、こう考えますと、玄武の第1層というのは、文書の字が左に九〇度寝ていきますので、縦に長くなるように、少なくとも大谷一四七〇文書を含む左側としてここに一続き、さらに旅順の文書を含む真中の位置でここに一続き、そしてその右にもあつたはずですから、第1層というのは、縦に伸びるように左・中・右の三列、三紙分を費やして置いたということがわかってくる。次には第2層がほしいわけですが、第2層はありません。龍谷大学に第2層の断片が数点あります。先に話題にしましたように、大谷文書の二三七六Ⅲの裏に蛇の彩画が一部だけ残っています。これは、第1層の蛇の彩画がある層から第2層を剝がす時に、第2層が持っていつてしまった。第2層は、蛇の彩画を一部持っていないところは裏側で、文書がある側はこれで、⑨の輪郭と合います。こういうふうになっていくのだらうと思います。裏側に蛇の彩画の部分が残っていることから探しますと、さらに大谷四八八一も第2層だと考えられます。プロジェクト画像のように、大谷四八八一の表はこれです。裏の、左下部分のここに赤茶と黒があります。第2層の裏に、先ほどと同様に、剝がす時に持ってこられている彩画の一部があることになりました。さらに第2層は他にもあつて、大谷二八二九文書、これはプロジェクト画像のように拡大すると朱印の下あたりの文字の上にかぶさって、黒と赤茶の彩画の残存が付いています。この文書は、二八二九の表側にダイレクトに彩画の残りが付いています。したがって、大谷二八二九は第2層なのですが、ここだけ他の文書断片と違って裏返しと考えられます。さらに第2層を探しますと、大谷三三七五という足の形の文書断片

で、プロジェクター画像で示しましたこれは裏側です。足の付け根のこのところに、彩画の第1層の部分がわずかに残っています。ボードでもマグネットで重ねますと、基本的にはここに来るのですが、この裏側には彩画の層が残っている。今、ボードの第2層を見ますと、第2層の断片コピーには黄色の付箋が付いているのですが、第2層は、すべて文字の方向は縦です。大谷二八二九のこの文書断片だけは裏返しです。文書は、第2層は横に長くなるような文書を上・中・下の三段に置いているのです。

そのような作業をやっていきますと、二枚目の縦長でカラーのプリントにありますように、玄武の文書が配置されていきますが、特に第1層、第2層、仮第3層あたりが第一の大変な山場です。第3層は結構面倒ですが、IDPで公表されている画像と龍谷大学の古典籍のページで公表されている画像をつないでいきます。第1層と第2層は確定ですが、第3層以降は、重ね合わせの順番がよくわかりません。第9層まで確認できますが、貼り合わせの文書が経年破損で開いてばらばらになった時に、一番外側ではない層なのに一番外側のような見え方をすることもあります。汚れ、シミが隣の層の紙へ、さらに隣の層の紙へと大きくなっていくことがあるなど、まだまだ検討の余地がありますから、第3層以降については、手前に「仮」を付けたわけです。

ただ、紙の強度からすると、彩画層である第1層が、縦方向に長い三紙が左中右に並んでいる。第2層は横方向に長い三紙が上中下に並んでいることが明らかですし、層としては第9層までのうち、縦長の紙の置き方のもの、すなわち字が寝ているのが、第1層、第3層、第5層、第7層、第9層の計五層になるのだろうと思われれます。字が上下方向で寝ていないもの、そのままか一八〇度回転しているのが、第2層、第4層、第6層、第8層の、計四層をなしているだろうということも、同様に考えられます。これまでの古文書の研究は、『大谷文書集成』でもわかりますし、その他のいろいろな研究から、官庁文書や、諸種文書のような一括できない、それぞれさらに細かい名前がつくものもありますが、たとえば仮第3層のような給田文書の層、プリントにカラーで載せている仮第3層は層としては未確定ですが、この給田文書層1は縦長に置かれた二紙、玄武の、向かって右の足に紙が少し足りないもので、さらに一紙あるかもしれませんが、二・三紙で、文書の種類は同じ給田文書というものです。

以上のような文書の層が、並べ置かれて重ね合わされ、貼られたのだろうと考えてよろしいかと思われます。これは、青龍関係文書の層の研究において、給田層1、給田層2などが指摘されていることと相通じます。仮第3層給田文書層1と、仮第4層給田文書層2は、同じ給田文書

という種類の文書で、小さな字と大きな字が交互に書かれた姿になっているのですが、同じ給田文書でも縦長、縦置きと、横長、横置きで、層が違ふということになりますし、下の足の部分も揃って残っていますから、それらがヒントになるのです。

なお、今回提示しましたつながりや配置によって、たとえば第2層における上の方、大谷二三七六Ⅲと大谷四八八一は、上の文書の一行目と下の文書の二行目、上の文書の二行目と下の文書の三行目が、それぞれ行としてつながり、史料として読むことができるようになります。仮第3層に置いた大谷一二四四と大谷二九七〇のつながりにはすでに研究がありますが、それと大谷二三三八がつながるだろうことが判明し、さらにそれと大谷二九七六が、下から上の方へつながっていきます。向かって左の足、大谷二九二六と上方の大谷二三八九の二点は、間が少し欠けていますが、一続きの文書という配置関係になります。仮第4層における向かって左の足の部分、文字テキストとしては上下逆ですが、その大谷二三九三からしばらく空いて大谷二九二九にテキストがつながることになる。このようなことがわかってくると考えられますので、文書テキストを中心に研究している人からも、何らかの、違うなら違ふという見解を言っていたかどうか、そういう刺激になるのだろうと思われます。特に仮第6層の退田文書層2は面白い形になります。仮第6層の上三つの断片のうち、左上の大谷二三七六Ⅱと右の大谷二九九五の二つの接続はすでに言われています。蛇の部分の大きいものと小さいものですが、しかしさらに、それと下の大谷二九九〇が、どこもつながらずわずかに離れながら、この輪郭ゆえに同じ文書だと言え、文書テキストとしても少し間がありますが同一行としてのつながりが想定できる、そのような面白いことになってくるわけですね。同様のことが、仮第8層の欠田文書層における大谷二三七六Ⅰと大谷四〇四三、これらもきちんとつながらないのですが、同一行として想定できます。ちょうど先に示しましたベゼクリク石窟の壁画や、話題にだけしたキジル石窟のドロナ像壁画の場合のように、断片がわずかな空間をはさんで位置想定できるのです。これらの問題の指摘によって、古文書を研究する立場の人にもご指摘をいただかなければいけません、結構面白い状況になってきているのではないかと思われるのです。仮第9層は、すでに指摘されているつながりです。仮第9層は、どの層に置くことができるか。文字が進む行が横に寝ていますから、仮にしても偶数層には置けません。奇数層は第7層、第5層、第3層、第1層ですが、第7層には足の付け根とそれより上の部分がありますし、第5層も足そのものがあります。第3層も同様です。第1層は、その裏面が彩画層ですから、問題の層は仮第9層にしかならないだろうと、このようなことを考えたわけです。

玄武の彩画はどんな彩画なのでしょう。玄武といっても亀の頭、尻尾、亀に巻きついている蛇の頭、それと亀の頭が睨み合っている形、輪

郭の玄武ではなく、この場合は、亀については正面から見た輪郭になると思います。手前すなわち下側に大きな前足が二つあり、その少し上で外側の左右に見えるのは遠くにある後ろ足、そして多分、蛇は旅順の彩画から二回巻いています。そのすぐ下は、亀の甲羅との間の空間で突き抜けた向こう側だと思えます。亀の甲羅の部分、甲羅はその縁を描くことが多く、縁は厚みをもたせます。甲羅の背中の向こう側は下がっていますから、縁は実際には見えないのですが、旅順の彩画で蛇の二巻きの少し下で、めくれ上がったように描かれた部分は、亀のお尻の側の縁だろうという想定ができます。最後に、正面からの玄武のサンプルがありました。実はこれをプリントに入れようと思いましたが、これは龍谷大学にご縁のある網干善教先生の、関西大学考古学研究室開設五拾周年記念の『考古学論叢』（関西大学、二〇〇三年）に載っている「四神にみる玄武の表現について―亀蛇合体図の比較研究―」という論文の第一一図ですが、プロジェクター画像は、それを拡大したものです。この例は前足しか見えず、腹の下がトンネルのように見通せます。今回扱った玄武は、輪郭からして、正面からですが、先ほどのものよりも少し上から見た形、後ろ足が少し遠くに見える、そのような玄武ではなかったかと思えます。

## おわりに

今日のこの話の前に、龍谷大学図書館で関係の文書の一部を見ることができなくて、無責任極まりないのですが、しかしそれでも相当な観察と指摘ができるくらい、鮮明な公表画像は威力を持っていて、これはどなたにでも開かれていると思えました。このような画像を提供しているIDP及び日本での担当役、また独自に別の形式の画像も公表している龍谷大学、これらの画像提供があったからこそ、このような作業ができる。若い学生、研究者、一般の方も含めて、資料を眺め観察し検討する楽しみが出てくるだろうと思います。ついでながら、こうなってくると消去法になってきますが、⑨にある大津氏他による玄武と爪形A、Bの提示に関連して、今日の私の話では大津氏他言う玄武は、玄武の上の部分であり、爪形は玄武の前足だということですが、それ以外に玄武関係文書は多数あったわけです。その他に、一覧表には雲型がA以降、多数あります。⑥で話題にしましたような雲も、単なる雲と思わずに、どうしようもないような雲でも八層まで確認できるということ、文字の方向が縦だったり横だったりすること、各層が何関係の文書かということとを全部追跡していくと、四神の青龍、朱雀、玄武及び靈芝雲、当然ながら白虎も含めてそれらを作っていた人たちが、大きな場所で紙を何列も横に並べ、さらに重ね合わせるために縦に並べ、ということを繰り返して

て貼り合わせ、外側に彩画を描いては切ったという作業の、かなりの部分が見えてくるという気もします。その復元は、一人で簡単にできるものではありません。大津氏他の場合も、三人で検討し数年がかりで詰めた成果ですが、私の場合は三週間前に一人で思い至ったことを、一か月を予定していました画像の処理もあつてなかなか間に合わず、今回提示のようなものになってしまいました。

最後にこれらの文書の接合を試みて、気になったのは旅順における一九一〇年代の作業、そしてその作業で多分、いろいろなこの種の古文書を「ひねくる」ことがあつたということです。そこには文書の剝離作業もあつたはずで、現在、龍谷大学に大谷文書があり、龍谷大学の先生はじめ内外の先生がいろいろな観点から検討し、よく知られている文書も、一点のただの断片も、これは何かあると思つてやるわけですね。やる気があつたら急に結論が見えてくるわけでもなく、やる気はともかく偶然に拾い物をしたようなこともあります。こちらでの文書整理はこちらの整理ですが、もう一段階前の、かつての関係者が旅順でどんな文書整理をしたか。作業途中になつてしまつたひとまとまり、文書の一部はどこかに貼り込まれ、一部は袋に入り、一部は日本に木箱で送り返された。一部は関係者の所持が許されて自坊に持ち帰つたこともあつたわけです。それぞれの時点での文書に関する作業、誰がやつても難しい場合は満足のいく作業はできず、誰かが途中でやつてもそこで中断せざるをえない面もあります。この玄武文書も、朱雀文書、青龍文書も同様です。特に青龍文書では、旅順博物館にあと一点、少なくとも尻尾の部分で文書の資料集に載つてないものがあるようで、そういう文書断片もまた考えながら追跡していかなければならないと思います。それらが進むころには、公表画像を眺め直して検討するのも、けつして専門家の独占するところではなく、いろいろな方が断片文書の接合についても発言できる時代になっているのだらうと思います。私の今日の話は以上ですが、もしご質問がございましたらお受けしたいと思います。

司会 この機会ですのでご質問があれば。

質問 私は満八六歳の憲法学者で、ご案内をいただきますので時々来ているのですが、非常に初歩的な質問ですが、大谷探検隊というのは明治のいつ頃、どこに行つて、チベットなのか、吐魯番なのか、何人くらいで何回くらい調査されたのか、お教え願いたいと思います。

片山 明治三五年（一九〇二年）八月一六日にロンドンを大谷光瑞新門、渡邊哲信、堀賢雄、井上弘圓、本多恵隆という人員で、途中ベルリンまでの同行者もいますが除外しますと、五人がロンドンを出発し、ロシアからカスピ海を渡って中央アジア、西側から入って中国の西の奥地、新疆のカシュガルに至り、そこから数か月で大谷光瑞は二人を従えインドへ行き、残った二人、渡邊と堀が一九〇二年から一九〇四年まで西域、現在は新疆ウイグル自治区になっていますが、当時の新疆省を調査する、一九〇二年～一九〇四年の第一次隊。第二次は一九〇八年～一九〇九年、橘瑞超と野村栄三郎が日本から出発し、一人は上海へ、一人は北京へ。北京で一九〇八年六月にモンゴルへ向けて陸路出発、モンゴルから西モンゴル、そして新疆の天山山脈北麓、ウルムチに行きまして、その後、吐魯番へ行く。橘と野村で吐魯番へ、その後はその西南のコルラから別れまして、橘瑞超だけが樓蘭遺跡、ミールン遺跡から西域南道を通ってカシュガルに至ります。荷物を大量に持っている方の野村栄三郎は、コルラから西域の北道を通ってカシュガルに至ります。一九〇九年七月に二人はカシュガルで落ち合って、一〇月末から一一月にかけて二人でインドに入り、当時、外遊中の大谷光瑞一行と合流します。第二次隊は野村一人だけが荷物を持って帰国し、第二次隊の中心的人物である橘瑞超は大谷光瑞のインド旅行からそのままヨーロッパ旅行についていきまして、一九一〇年二月にイギリスに着きます。同じ年の八月、もう一度ロンドンから橘瑞超が雇ったホップズという青年を助手に連れて二人で始めるのが第三次探検で、一九一〇年～一九一二年まで。一九一一年に吉川小一郎という第三次の後発隊の隊員が日本から行って敦煌で橘と合流します。帰国は橘瑞超が一九一二年、吉川小一郎が一九一四年ということ、一般に大谷探検隊は中国領中央アジアを中心していますが、ロシア領も通っています。インド隊もありましたし、後の青木文教の活動も入れますと、チベットにも関係しています。

中央アジアを中心とする一九〇二年～一九一四年までの第一次隊は大谷光瑞を含め五名、第二次隊は二名、第三次隊二名、ただし連動して動いているインド調査やその他の合流している人を入れると、結構な人数になります。そのような探検隊が、多くの中央アジアの文物、中国内地のもの、インド、別途チベットの文物をもたらしたということです。

質問 旅順、龍谷大学と国をまたがって散逸した資料を接合して研究していかれるには、大変な根気がいると思いますが、接合作業から見えてくるものは何か。玄武の図で京都にも玄武神社がありますが、そこで見た画像とちよっと違うのですが、玄武にはいくつかのパターンがあるも

のでしょうか。

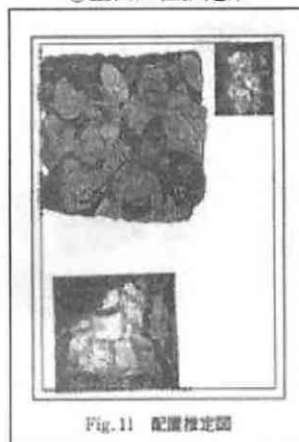
片山 断片をつないで見えてくるものというのは、実は作業途上でございます。私は物価文書という漢文文書の接合もつい最近扱ったのですが、今回の吐魯番の墓中の四壁に置いたであろう四神と関係のある一連のものも、最近研究されてきていますので、青龍の復元研究に次いで朱雀、盤芝雲と、自分がたまたまやったことで玄武も、いつか進めないとけない。一群の青龍文書が約七〇点、玄武が四〇点、朱雀が何点か、雲も十何種類ありますから、それらを上手にグルーピングしたいのですが、難しさを伴っています。今回、玄武の真中の部分が、結構難しく、角丸の四角形に近い形のところから変わった足が出ている。これの置き方がわからなかったのですが、今回、何とか配置を試みて、玄武関係文書が四〇点とわかりました。しかしまだ出てくるのかもしれない。雲も一個一個、雲からつぶしていくと、この一連の文書群が一つの墓からごっそりと、二百何十点が出てきていて、層としては九層が最高で、輪郭で切り抜いて使った部分と残余の捨てた分があります。そういうことを合わせ考えるという流れの中で、今回は前から興味をもっていた玄武を扱いました。まずは一つずつ扱って、同時に作成の手順や剝離の作業を想定しているという段階で、断片接合作業全体から見えてくるものは、作業途上の現在は模索中です。玄武に関しては、先にプリントにも入れ話題にもしました網干先生の「四神にみる玄武の表現について―亀蛇合体図像の比較研究―」という論文が、かなり例を網羅しているのではないかと思います。私は、ご指摘のような日本のものを全部網羅していません。中国の西域で、吐魯番の玄武はこれが初めてだと思えます。網干先生は、朝鮮半島から中国内地にかけて、かなり網羅していますから、いろんな玄武、相当な数で何十という、四〇以上の図版を載せています。全部を並べたわけではないでしょうが、その時代や特徴のポイントについて論ずることが重要なようです。あとでご覧ください。

司会 どうもありがとうございました。今日、片山先生のお話で唐代の吐魯番の古墓の中から大谷探検隊が帰ってきたもの、もとの形に復元すると、逆に唐代のお墓の葬り方、お墓の中で四神図とか上の方には星宿とか星座図があると思うのですが、そういうものがきっちりした形で葬られていた。そういうこともわかってくるのではないか。これから先生がご研究なさって、こういう形を見せていただければ私たちも非常に励みになると思います。本日はどうも片山先生、ありがとうございました。

①ベゼクリク壁画「衆人奏楽図」



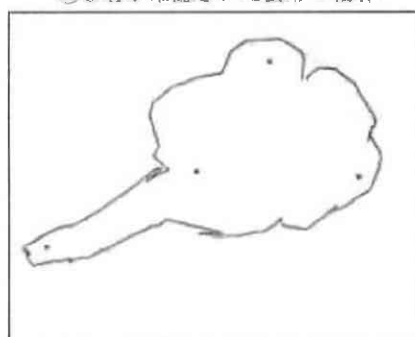
②壁画配置推定案



③現地写真（許可撮影）

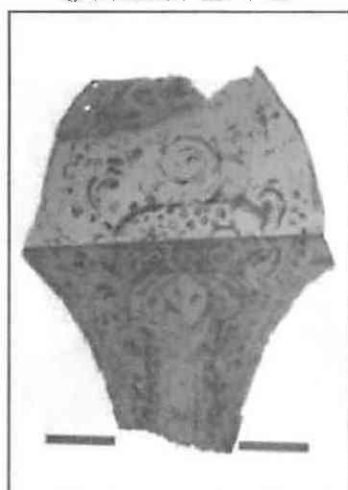


④8層が確認された雲形の輪郭

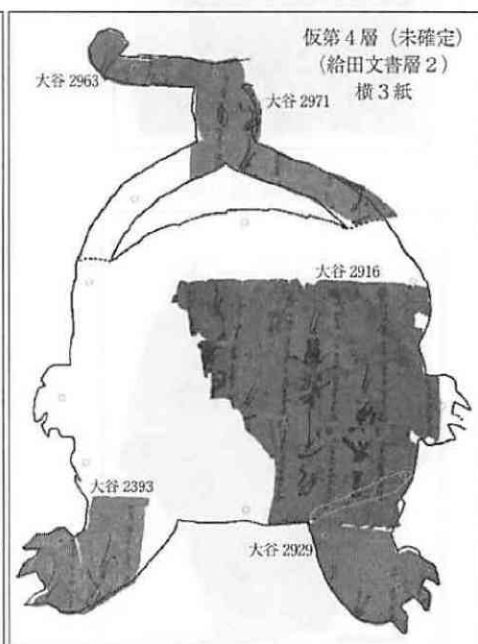
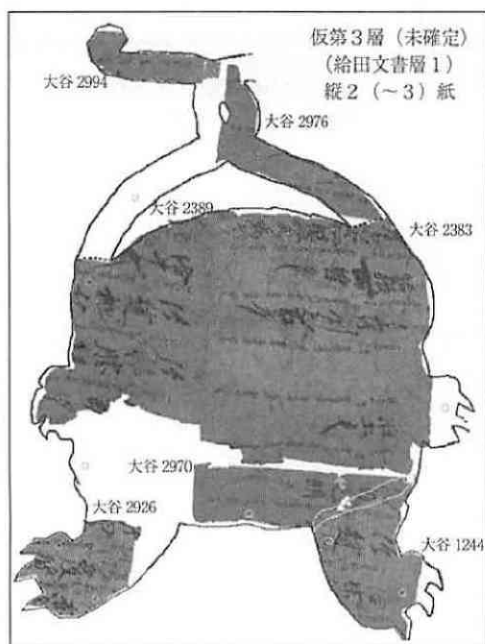
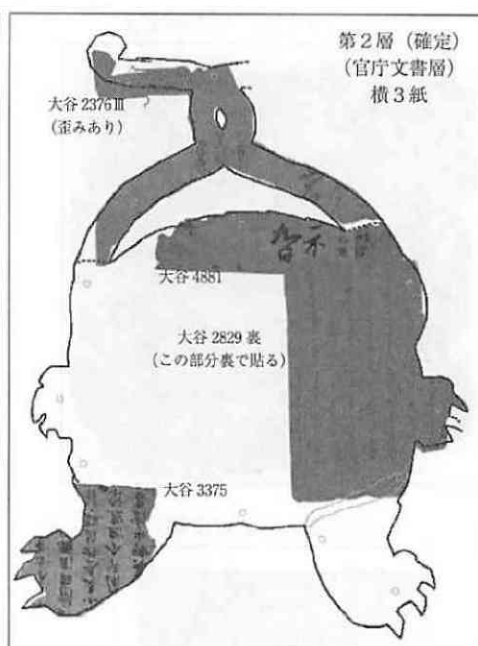
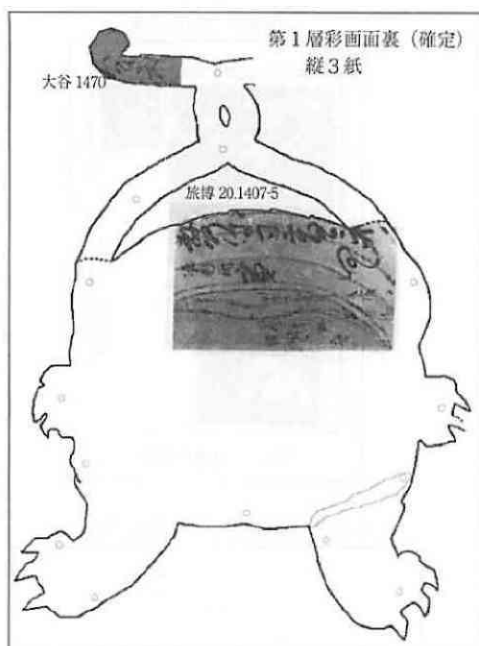


旅譚には同形の影画が2層ある。  
剥離時に外側彩画層の影画が第2  
層にもっていかれたことになる。

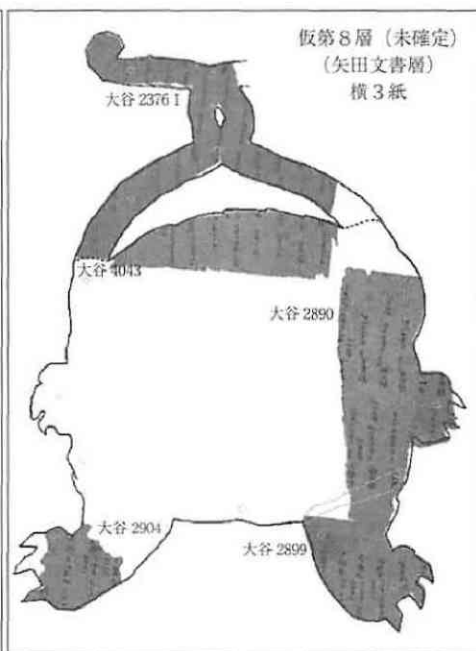
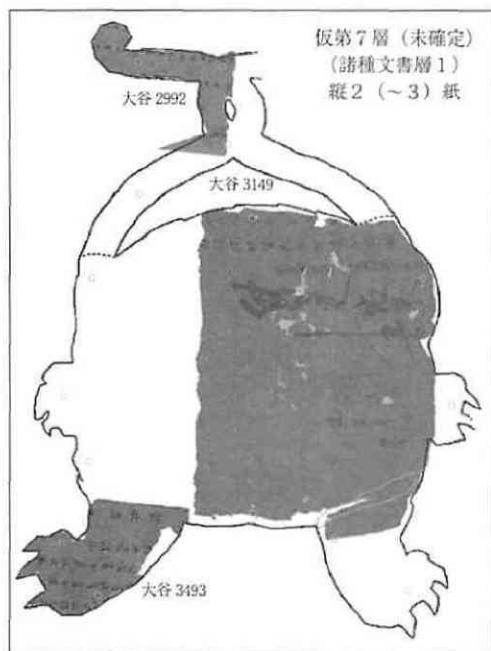
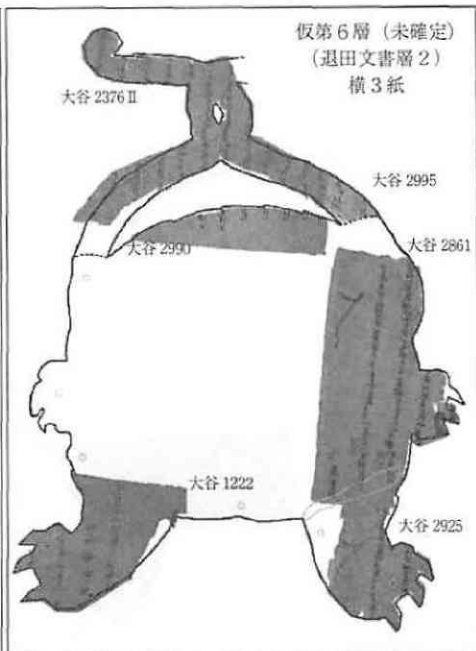
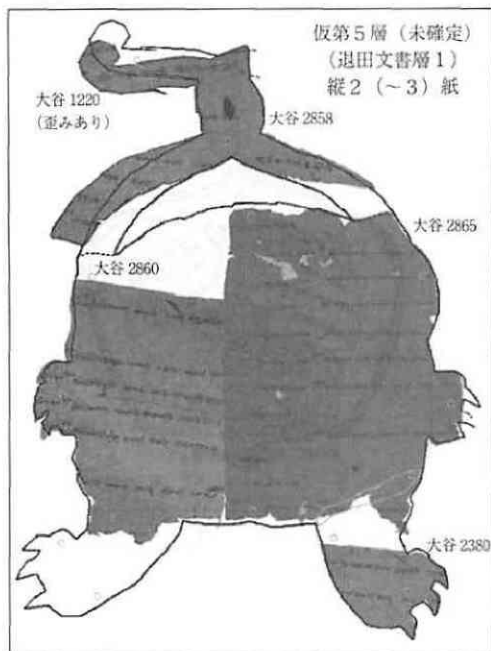
⑤朱雀頭部彩画の接合

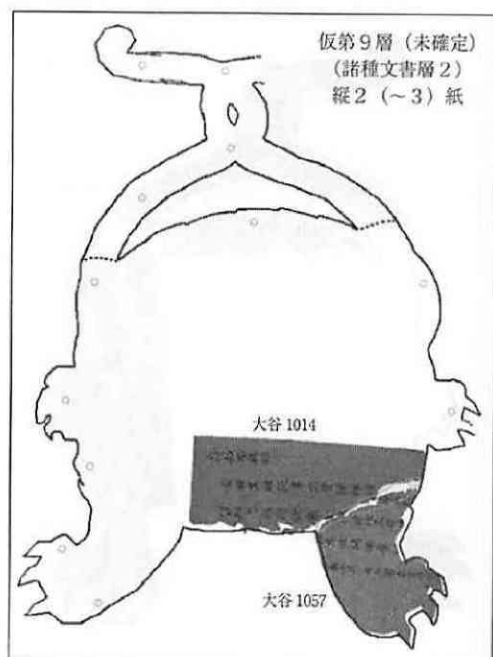


上は旅博 20.1407-3、中は上  
野アキ氏紹介断片b、下は旅博  
20.1405-3。カラー提示あり。

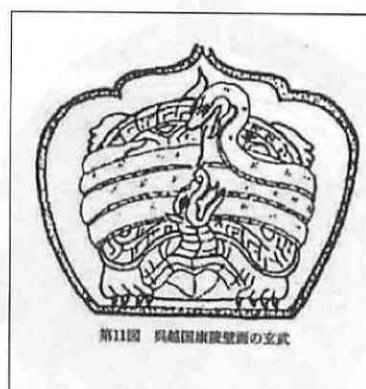


大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって





参考：正面からの玄武



藤千鶴教「四神にみる玄武の表現について  
—角蛇合体図像の比較研究—」『考古学論叢』上巻、  
関西大学、2003年、8ページ。

大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって